論文審査の結果の要旨

氏名　佐藤健二

本論文は、社会学に歴史性の復権を試みる佐藤氏が、柳田国男の著作論考を素材に、構築される〈歴史社会学〉の研究主体に求められるべき方法態度を明らかにし、そのための方法的課題として「資料空間」の構築という方法作業の重要性を明らかにしたものである。

第１章は、〈歴史社会学〉という枠組みで、柳田国男を対象とする問題意識の基本構成が述べられる。社会学の理論図式の歴史領域への応用であるとする、固定的で社会学中心主義的な見方とは距離をとり、問題意識の現在性、比較の脱領域性、研究主体の社会的・歴史的位置に対する自己反省性、という３点を方法的特質として重視し、そこから柳田国男の「郷土研究」や「民俗学」がもつ批判力を再評価している。

第 2 章では、柳田の方法意識の特質と日本における「近代」との関係を論じ、漢字とかなの差異、公的な標準語と日常語との落差など、日本近代の言語空間形成の歴史的特異性から、言語化されず周辺部として残されている民衆の日常生活こそが柳田のフィールドとして把握され、また実験的な作品としての『明治大正史世相篇』の分析解釈では、「記述」自体の積極的な役割が論じられている。

第 3 章では、〈伝承／常民モデル〉から〈テクスト／読者モデル〉への〈パラダイム転換〉を試み、従来の柳田の解釈の読み直しを論じている。柳田の国語政策に対する批判や、注目されなかった柳田の「新語論」に焦点に据え、従来の「農政学／民俗学」の断絶論的考え方や、「昔話研究／世間話研究」の分離論を批判し、柳田の研究に新たな解釈を行う。これは第４章で論じられる資料空間の再編成の作業を、佐藤氏自身が行った成果の１つとして評価されるべきであろう。

第 4 章は、その全体が結論の章である。印刷され共有されたテクストと近代的な読者が作りあげる「読書空間」の考えかたを発展させ、「資料空間」すなわち「リレーショナル・データベースの構築」の社会学における戦略性について述べる。彼の「常民」概念を、身体を有する読者の主体性ととらえると同時に、テクストそのものの社会的位置を測定する作業の重要性を論じる。この論文でいう「リレーショナル・データベース」とは、一次元的で機械的網羅的なデータ集成ではなく、資料として切り取られたものの社会的な存在形態の特質を写し出すような多次元的な構造を有し、利用する主体に新しい見方を提供するものとして構想されている。「書かれたものの権力」、すなわち書かれた資料が社会的に存在しているという事実そのものが、歴史の構築に深く作用することを指摘し、オルターナティブの構想を可能にするものとして、柳田国男全集の編集をめぐる論点が取り上げられている。

このように本論文は、柳田を社会学の理論や方法論の領域でどのように取り扱うか、を素材にしながら、社会学の「歴史性」に関して求められる方法態度に変革を迫る野心的な論文である。難点を指摘すれば、佐藤氏の〈歴史社会学〉という枠組みの完成には、「資料空間」のもつ媒介的役割の意義のより一層の説明が必要であろう。また記述上、テクストとしての柳田国男の再解釈と、方法態度としての「歴史社会学」の主張、研究者である佐藤健二自身との三項関係が今ひとつわかりにくいという指摘もあった。

しかし『定本柳田国男集』から『柳田国男全集』への編集方針の変更に自ら積極的に関わり、柳田の著作のテクスト空間を徹底的に再検討する方法態度としての〈歴史社会学〉を掲げ、従来の柳田研究に新領域を開拓したばかりでなく、社会学それ自身の「歴史性」に関する方法的な提案を行った努力と貢献は大きい。

したがってこの研究は学界に大きく貢献するものと評価されよう。よって本審査委員会は、本論文が博士（社会学）の学位に相当すると判断する。